第４群－２

ＥＱテストを用いて測定した本院病棟看護婦の情動傾向と経験年数との関連

○三谷幸子　松本陽子
香川綾　高尾久美
中谷美子　安藤幸代　（高松赤十字病院）

【はじめに】

「ＥＱ」とは心の知能指数、すなわち情動指数である。ダニエル・ゴールマンは著書「EMOTIONAL INTELLIGENCE」の中で、「自分の本当の気持ちを自覚し尊重して、心から納得できる決断をくだす能力。情動を制御し、不安や怒りのようなストレスのもとになる感情を制御する能力。目標の追求に挫折したときでも楽観を捨てず、自分自身を励ます能力。他人の気持ちを感じとる共感能力。集団の中で調和を保ち、協力しあう社会的能力。」と述べている。内山が試案したＥＱテストは10ファクターで構成され、その中に愛他心、共感的理解など、看護婦として特に必要とされるものが含まれることに着目、看護婦を客観的にみる一つの指標になるのではないかと考え、本院看護婦の情動傾向を調査しその特徴と経験年数における関連を研究したのでここに報告する。

【研究目的】

1. 本院病棟看護婦の情動傾向をＥＱを用いて分析する。
2. ＥＱと経験年数との関連をみる。

【研究方法】

対象：高松赤十字病院に勤務する病棟看護婦、及び助産婦317名（病棟婦長・係長、准看護婦は除く）

調査方法：内山喜久雄氏作成のＥＱテストを使用

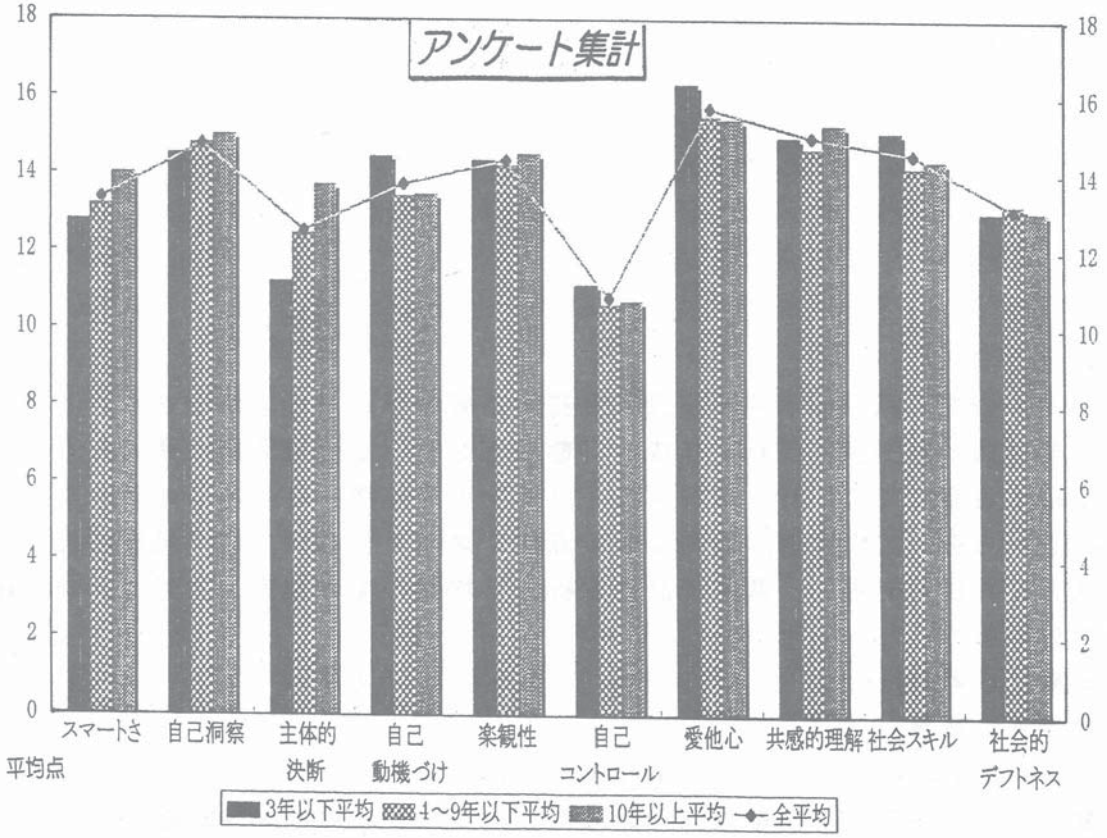
分析方法：看護婦としての経験年数３年以下＝Ａ群、４～９年＝Ｂ群、10年以上＝Ｃ群とした。ＥＱの構成因子である「スマートさ」「自己洞察」「主体的決断」「自己動機づけ」「楽観性」「自己コントロール」「愛他心」「共感的理解」「社会スキル」「社会的デフトネス」について全体と経験年数別に平均値を出し、各ファクターと経験年数との関連を調べるためにカイ二乗検定を行ない、Ａ～Ｃの二群間を比較するためMann-whitneyのＵ検定を行なった。

【結果】

ＥＱテストの合計平均点は看護婦全体で137.97点（240点満点）経験年数別にみると、Ａ群＝138.05点、Ｂ群＝137.61点、Ｃ群＝138.25点、と合計平均点では特に差は見られなかった。ファクター別にみると、平均得点は看護婦全体では「愛他心」が最も高く、次いで「共感的理解」「自己洞察」「社会スキル」「楽観性」「自己動機づけ」「スマートさ」「社会的デフトネス」「主体的決断」の順であり、最も低いのは「自己コントロール」であった。特に「愛他心」はどの年代においても一番高く、逆に「自己コントロール」は、どの年代においても一番低かった。

各ファクターごとに臨床看護経験年数との関連をみると、「スマートさ」におい

てはＢ群とＣ群の間、Ａ群とＣ群の間に有意差を認め、経験年数が長くなるほどその能力が増すといえた。「主体的決断」においても全ての２群間に有意差を認め、経験年数が長くなるほどその能力が増し、経験年数と深い関連があった。「自己動機づけ」は、経験年数との関連はなかったが、Ａ群とＢ群の間に有意差を認め、３年以下のほうが４～９年より「自己動機づけ」が高かった。

【考察】

本院看護婦の情動傾向は、全体平均でも経験年数別でも「愛他心」が最も高く「自己コントロール」が最も低い。「愛他心」が最も高いのは、他人に温かい気持ちを持つという看護婦の基本的精神の表れと考えられる。「自己洞察」が比較的高いのに対し「自己コントロール」が低いという現象は、他者に主眼をおいた職種の特性からくる、自己主張的な行動に関しての関心の低さや、ストレス・コーピングとの関連が推察される。「スマートさ」「主体的決断」は経験年数との関連が認められた。両者共看護婦のキャリア育成には必須であり、実践場面での判断や問題解決におけるリーダーシップの発揮等により育成される結果と考えられた。「自己動機づけ」は３年以下のほうが４～９年より有意に高い。これは３年以下には、新採用から経過を追った卒後教育が整っており、自己の成長過程での目的、目標も明確であるためと考えられる。本院の先行研究で、動機づけはバーンアウトと関連があり、本院では３年以下にバーンアウトが低く、４～６年、10～15年、７～９年の順に、バーンアウトが多いと報告されている。この研究結果と今回の結果はほぼ一致しており、今後キャリア育成と共にモチベーション管理への示唆を得た。